

履中天皇、

仁徳帝の長子なり。

母は、磐之媛皇后。

仁徳帝の三十一年、

立ちて皇太子となる。

八十七年正月、

仁徳帝崩ず。

皇太子、難波宮に居り、

既に喪を除きて、

未だ位に即かず。

住吉仲皇子反し、

兵を擧げて宮を圍む。

皇太子、方に酒を被りて臥せり。

時に平群木兔宿禰・

物部大前宿禰・阿知使主等、

入りて告げしに、

皇太子信ぜず。

木兔等、皇太子を扶け、

馬に上せて逃る。

仲皇子、遂に宮を焚く。

皇太子、

河内埴生坂に至りて醒め。

顧みて煙燄を視て、

大に驚き、

馳せて大阪より將に

倭に入らんとし、

飛鳥山の下に至りて、

一少女に遇ひ、

山に人ありや

と問ひしに、

答へて曰く、

兵を執る者、

山に充滿せり。

宜しく當摩路よりすべしと。

皇太子、

乃ち當縣の兵を發して、

龍田山を踰ゆ。

兵を執る者數十人を見て、

皇太子、其の賊たらんことを疑ひ、

兵を山中に伏せ、

人をして問はしめしに、

對へて曰く、

淡路の野島の海人なり。

安曇連濱子の命を以て太子を追ふと。

皇太子、

伏を發して悉く焉を捕獲す。

倭の直吾子籠、

兵を聚めて、

將に皇太子を邀へんとせしに、

其の兵の衆きを望み、

懼れて降りぬ。

くわうたいし いそのかみふるのかみのみや とらま  
皇太子、右上振神宮に駐り、  
みづはわけのみこ なかつみこ ちう  
瑞齒別皇子・仲皇子を誅す。

このひ  
是の日、  
あづみのむらじはまこ とりこ  
安曇連濱子を擒にす。

つちのとうし  
十月七日己丑、  
にんとくてんわう ほうむ  
仁徳天皇を葬る。

かのえね  
元年庚子、  
みづのえうま ついたち  
春二月壬午の朔、

てんわう くらるつ  
天皇、位に即く。  
これ いざほわけのすめらみこと  
是を去來穗別天皇となす。

ひのとら  
夏四月十七日丁酉、  
あづみのむらじはまこ め  
安曇連濱子を召し、

し げん これ げい  
死を滅じて之を黥し、  
ぬしま あま つみ ゆる  
野島の海人の罪を釋して、

やまと こもしろのみやけ えき  
倭の蔣代屯倉に役す。  
あき みづのえね  
秋七月四日壬子

くろひめ い ひ  
黒媛を納れて妃となす。

二年辛丑、

かのとうし

春正月四日己酉、

はるしょうがつ じちのとうし

くわうていみずはわけのみこ

帝弟瑞齒別皇子を立て、

た

くわうたいし

皇太子となす。

冬十月、

みやこ

いはれ

うつ

都を磐余に遷す。

へぐりのつくのすくね

平群木兔宿禰・

そがのまぢのすくね

蘇我満智宿禰・

ものゝへのおほむらじいこみつ

物部大連伊苦呂弗・

かつらぎのおみつぶら とも ましひとと

葛城臣圓、共に政を執る。

いはれのいけ つく

十一月磐余池を作る。

みづのえとら

三年壬寅、

かのとひつて

冬十一月六日辛未、

てんわう くわうひ ふね うか

天皇、皇妃と舟を泛べて、

いはれのいちしのいけ えん

磐余市磯池に宴す。

あうくわ

櫻花あり。

ぎよさん お

御盞に落つ。



てんわう もつ ずる  
天皇、以て瑞となし、

つひ みや なづ  
遂に宮を名けて

いはれのわかざくらのみや  
磐余稚櫻宮と曰ふ。

みづのとう  
四年癸卯、

つちのえいぬ  
秋八月八日戊戌、

はじめ ふひと しよこく お  
始て史を諸國に置き、

もつ げんじ する  
以て言事を記して、

よも こころざし たつ  
四方の志を達せしむ。

いそのかみのうてな うが  
冬十月、石上溝を鑿つ。

きのえたつ  
五年甲辰、

みづのえとら  
秋九月十八日壬寅、

てんわう  
天皇、

あはぢしま かり  
淡路島に狩し、

げいと もつ  
鯨徒を以て

うまかひへ  
飼部となすことを停む。

ひのえうま  
二十二日丙午、

あはぢ いた  
淡路より至る。

六年乙巳、

きのとみ

春正月六日戊子、

つちのえね

草香幡梭皇女を立て、

くわこうすい

皇后となす。

かのとう

九日辛卯、

はじめ

くらつかさ

始て藏職を置き、

お

因て藏部を定む。

よつ

くらひと

さだ

二月癸丑の朔、

みづのとうし

ついたち

大姫郎姫・

ふとひめのいらつめ

高鶴郎姫を納れて

い

高鶴郎姫を納れて

ひん

嬪となす。

てんわう

三月天皇、

ふよ

不豫、

ひのえさる

十五日丙申、

わかさぐらのみや

ほう

稚櫻宮に崩す。

もずのみはらのみささぎ

ほうむ

百舌鳥耳原陵に葬る。

つるし

りちうてんわう

追諡して履中天皇と曰ふ。

い